【京都新聞賞】

大切な友だち

甲賀市立水口中学校の生徒の作品

いじめはつらい。暗い深い所に一人でいて誰も助けてはくれない。いじめのつらさを、この作文を通して世界中の人々が知れば、そんなつらいものは消えていくのだろうか。

私が小学生のころの話だ。朝、私が教室に入ると、いつもと同じようにあの子は一人で本を読んでいた。教室にいる他の子は、何人かで集まっておしゃべりをしたり、文房具を見せ合ったりしている。一人でいるのは、いつもあの子だけだった。教室移動の時も、体育の二人ペアも、休み時間も、放課後も。さみしくないのかなと思い、ある日、私は声をかけた。「それ何の本。おもしろそう。」その子はおどろいた目で私を見た。だが、ゆっくりと本の内容を教えてくれた。チャイムが鳴ったので「またね」と手をふり、席に着くと隣の席の子が「あの子と何話してたの。」と私に聞いてきた。え、何で知りたいんだろうと思いながらも「読んでた本のことで話していたの。」と言うと「そう。」と何の関心もなく、前に向き直ってしまった。「変なの。」私は小声でつぶやいた。この後、自分に何が起こるかも知らずに・・・。

クラスの子の、私に対する対応が変わったのは、あれから二日後だった。朝、「おはよう。」と言っても返事が返ってこない。クスクスと笑う声が聞こえる。見ると私の机が逆さまになっていた。私はランドセルを放ってトイレへかけこんだ。目が熱くなる。鏡を見ると涙が出ていた。しゃっくりが止まったところで教室にもどるとドアに鍵がかかっていて教室に入れない。中でクラスメイトがあざ笑いしている。いじめだ。私はそう確信した。つらかった。とても、苦しかった。誰も、「大丈夫。」とも言ってくれない。誰も、「もう止めなよ。」とも言ってくれない。さびしかった。一人だった。はじめて学校に行きたくないと思った日だった。

今日も一人で通学路をトボトボと歩いている。「何かしたかな。」明日、クラスメイトに聞いてみようと思った。ドキドキして眠れなかった。そしてやって来た次の日、私は「おはよう。」と元気に教室に入った。返事が来ないなんて、分かっている。そしてランドセルを背負ったまま、いじめっ子のところに行った。「どうして私をいじめるの。私、何かした。」勇気を出してそう言うと、意外な返事が返ってきた。「だってあんた、あんな地味な子と話したんでしょう。信じられ

ない。」と。あんな地味な子、とは、今日も一人で本を読んでいる、あの子だろう。そして続けてこう言った。「いいよ、いじめるの止めてあげる。でも条件ね。私達と一緒に、あの子をいじめること。」ビックリした。ひどいことだと思った。けれど私はうなずいてしまった。その日はいじめっ子達と一緒に帰った。誰かと一緒に帰るなんて、とても久しぶりのことだった。でも帰りながら、私は考えた。最悪だ。こんな自分、最悪最低だ。だって、自分だけを救うために、他の人を犠牲にしたのだ。ひどいことをした。と後悔した。でもあのままいじめられるのは避けたかった。そのために、この道を選んだんだ。

次の日学校に行くと、私の机ではなく、あの子の机が逆さまになっていた。不思議だった。いじめはこんな簡単に終わるものなのか。あんな長かったいじめは、一日何も無かったかのようにあとかたも無く消えていく。でも、いじめられていた人の心には、一生残る。その傷は消えない。ずっと。体育の時間、更衣室でいじめっ子達と着がえていると、あの子が更衣室に入ってきた。「うわ、来た。」いきなり隣の子が言いだした。「本当だ、来た来た。」「そこ服広げて。」まわりの子も言いだす。ロッカーは他人の服でいっぱいになり、その子が使うロッカーがない。仕方なく、空いている更衣室の真ん中で着がえ始めたのを見て私は「ひどい。何とかしないと。」と思った。自分がいじめられた時を思い出した。つらかった。逃げだしたかった。その記憶がよみがえったとたん、今自分がしていることが取り返しのつかないことだと分かった。翌日の休み時間、私を含め四人であの子の所へ向かった。この四人は、あの子の味方になりたい四人だ。信用してくれるか分からないけれど、やらなくては始まらない。「ねえ、今から砂場でおにごっこするけど、一緒にやらない。」とまず声をかけてみた。すごく迷った末に一緒にやることになった。実際にやっている最中、あの子はずっと笑っていた。きっと、今までのつらかった分の笑顔だと思った。本当におどろくほど、ずっと笑顔だった。つられて私も笑った。三人も笑った。最終的には、五人で声を上げて笑った。何がおもしろいのか分からなかった。でも心から笑えた。すごく幸せな気分だった。この時、笑顔の広がりと友達の意味を知った。これからも勇気を出せば、きっと何だってできる気がした。最後に、いじめは人の全てを傷つけるものである。いじめや差別はあってはいけないものだ。